

第9回 大賞(金の星賞)受賞作品

「うそつきねこムクリ」

群馬県 県立高崎東高等学校 3年 吉澤 仁衣那



賢治のまちから
高校生★童話大賞



大賞〈金の星賞〉

『うそつきねこムクリ』

群馬県 県立高崎東高等学校 三年 吉澤 仁衣 那

とある森の、ある小高い丘の上に、「うそつきねこムクリ」の石像がある。遠い昔、ムクリといううそつきねこが、たくさんの嘘をついた罰として、石にされてしまったのだ。森に住む動物たち、特に子どもを持つ母親は、よく自分の子どもにこう言つて聞かせた。

「嘘をつくと、ムクリみたいに石にされてしまうよ」と。

けれど、森の木々は知っている。森の木々だけが、知っている。

ムクリがついた最後の嘘を。石になつた本当の理由を。

あるところに、たくさん動物がすむ森があつた。そこで一匹のねこがうまれた。

母親はその子ねこを産み落とすと同時に死んでしまつたが、そのねこはムクリと名づけられ、すくすくと育つた。

ところで、ムクリの生まれた日の夜、暗い空できらきらと輝いていた星たちが、一斉に空を滑り落ち、どこか遠くに流れしていく、という不思議なことが起こつた。動物たちは空を見上げて目を丸くした。まだ目の開かない生まれたてのムクリだけが、のんきに眠りこんでいた。この辺りで一番長く生きている、

占い師のふるぎつねは、ムクリは何か不思議な力を宿すねこだらうと予言した。

やがて、ふるぎつねの言うとおり、ムクリが不思議な力をもつていてることがはつきりした。右足に不自由を持つて生まれたムクリだつたが、ムクリが話すことは、なんとすべて本当のことになると変わるのでだ。

ムクリの父親はとても喜び、神様が授けてくれたに違いないから、その力を大切にしなさいとムクリに教えた。そして、その力は自分以外の誰かのために、どうしても必要なときにだけ使うようにと注意をあたえたが、ムクリはそれが気に入らなかつた。

ムクリは時々、父親に隠れて自分のことに力を使つた。小腹がすいた時や、喉がかわいた時、こつそりと甘い木の実や上等なミルクを出しては楽しん



だ。父親が自身の死を悟り、ふらりと出かけたきり一度と戻らなくなると、ムクリはますます身勝手なことに力を使うようになつた。森にすむ動物たちを、ムクリはよく嘘でからかつた。その嘘がすべて本当のことにかわるものだから、動物たちはムクリを恐れ、気味悪がり、近づこうとしなかつた。ムクリはいつも独りだつたが、それを気にしなかつた。

あるときムクリは、森の奥で魔女に会つた。背の高い、すらりとした細長い手足が、黒いマントからはみ出でている。ムクリには、それが動物たちが噂し、恐れている魔女だとすぐにわかつた。そして、ひとつからかつてやろうと決めた。ムクリに怖いものなどなかつた。

「やあ、ばあさん。どうしたんだい」

ムクリが声をかけると、魔女は三日月形の日をさらに細め、いやな感じのするきんきん声で言つた。

「おやおや、こんにちは。木苺(きいちご)をさがしに、はるばる山二つ越えてやつてきたんだがね。どこかでいいのを見なかつたかい？ あたしや、あれが大好物なんだ」

ムクリはそれを聞くと、笑つて言つた。

「そんなら、ばあさん。あんたの後ろに、でつかくて熟じゅうれたやつがあるじやないか。気がつかなかつたのかい？」

ムクリはいつものように嘘を言つた。たちまち魔女の後ろに、大きくてよく熟した木苺がたくさん現れた。魔女は訝しげに振り返り、そして嬉しそうに声を上げた。しかし、魔女がそれを拾おうと腰をかがめたとき、ムクリはまた口を開いた。

「おつと、ばあさん。ちがうよ。木苺があるのはあんたの後ろ、つて言つたじやないか」

魔女が手を伸ばした先で、木苺はぱつと消え、また魔女の後ろに姿を現した。

魔女が振り返つて手を伸ばすと、ムクリはその度に嘘を言つて木苺を移動させた。しばらくそれを繰り返し、最後に魔女の頭からばらばらと木苺を降らせたところで、魔女はついにかんかんになつた。

大笑いするムクリに骨ばつた長い指をつきつけ、魔女は恐ろしい声で叫んだ。

「お前に呪いをかけてやる！ いいかい、次に嘘を言つたそのときが、お前の最後だ。どんなに些細(ささい)なことでも、なにか嘘をついたとたん、お前はただの石になるんだ！」



ムクリは笑うのをやめた。

「そんな、まさか」

「嘘だと思うなら、今ここで嘘をついてごらん！ そうしたら、まちがいなくお前は終わりだよ。今殺してやつてもいいんだが、あたしや、あんたみたいな汚い毛皮はいらないんでね」

魔女は甲高く笑うと、木苺を踏みつけて去つていった。

ムクリはそれから、石になるのを恐れるあまり、すっかり無口になつた。森の動物たちはその様子を不思議に思つたが、ムクリに近づいて訳を尋ねるものはいなかつた。

あるとき、森に一匹のたびねこがやつて來た。うつくしい毛並みと、勇敢な心をもつたびねこで、名をフイファイルといつた。フイファイルは森中の動物たちに歓迎され、森の広場で宴が行われた。たくさんの動物が参加したが、ムクリはそれを近くの小高い丘から、いつものように黙つて眺めているだけだつた。

しかし、フイファイルがムクリを見つけ、ムクリのところへやつて來た。

「やあ、私の名はフイファイル。きみは？」

ムクリは、恐る恐る口を開いた。頭の中で、自分の言葉に嘘はないかとじつくり考えたあとで、ようやく、小さな声で言つた。

「ぼくはムクリ。この森へようこそ」

フイファイルはそれを聞いて微笑んだ。

「きみはいい声をしているな」

それから、フイファイルはムクリのところにたびたび訪れるようになつた。ムクリは相変わらず無口だったが、フイファイルはそんなムクリの傍らで、自らの冒険談を語り、楽しそうに笑つた。ムクリは嬉しかつた。月が二度目の満月を迎えた頃、フイファイルは、この森がとてもすきだと言つた。以前父と母が暮らしていたムクリの家は、ムクリがひとりで住むにはすこし広すぎた。そこで二匹は、一緒に暮らすようになつた。

二匹はたくさんの中の満月の夜を共に過ごした。ずいぶん時がたつた頃、イファイルはムクリに、どうしてそんなに声を出すのを恐れているのか、訊いた。

ムクリはしばらくじつと考え、そしてようやく、自分の力のことと、魔女にかけられた呪いのことを、全てフイファイルに打ち明けた。全ての話を聞き終えると、フイファイルは難しい顔をして言つた。

「たしかにきみは、魔女に無礼なことをした。しかし、それはもう何年も



昔のことじやないか。きみは、もう以前のきみとは違うのだろう? きみにはもう、そんな呪いは必要ない。魔女のところへ、謝りに行けばいい。呪いを解いてもらうんだ

ムクリは驚いて首を横に振った。あの恐ろしい魔女のところになど、どうしても行きたくなかったし、だいいち、ムクリは魔女の居場所を知らなかつた。

「その点については、心配はいらない。森の木々の、根ツトワークを知らないのかい。全ての木々はつながっているんだ、魔女の居場所など、すぐわかる」

「でも、だめだ。ぼくの悪い足では、とてもそんな遠くまでは行かれない」力なく言うムクリを、ファイファイルはじつと見つめた。すこしの沈黙があつた。

「よし、それなら、私が行こう」

ムクリは驚きのあまり飛び上がり、自分のしっぽを思い切り踏んづけた。痛みにうめきながら激しく首を振つたが、ファイファイルはやさしく笑うだけだつた。

「ぼくのために、きみがそこまでする必要がどこにある?」

ムクリは首を振りながら、ファイファイルに訊ねた。ファイファイルは言つた。

「きみはいい声をしている」

「そんなことが、理由になるのか」

「なるさ。私は、きみともっと多くのことを語りたいのだ。私が話すだけでなく、きみの声を、話をもつと聞きたいのだ。冗談を言つて笑い合いたいし、互いの夢を語り合いたい。それだつていうのに、そんな呪いがあるせいで、こんな当たり前のことすら満足にできないだなんて。おかしいじゃないか。まちがつてる」

ムクリは、ファイファイルの声に怒りがにじむのを感じて嬉しかつたが、どうしていいかわからなくなつた。

「私は本来たびねこだ。長旅には慣れている。心配はいらない。必ず、私はきみの元へ帰つてこよう。そのときには、きみの呪いは解けているんだ」ムクリは最後まで弱々しく首を振つていたが、ファイファイルの決意は変わらなかつた。

次の日、森に太陽が昇ると、ムクリとファイファイルはふたりで見つけた美味しい木苺のなる場所へ行き、籠にどつさり熟れた木苺を摘み取つた。籠をしょいこむと、ファイファイルは大きな声で森の木々に語りかけた。



「森の木々よ 森の木々よ

朝日にてらされたうつくしい木々たちよ

私の友に呪いをかけた

悪い魔女はどこにいる?

すると森の木々たちは一斉に囁きだした。たくさんの囁きは、やがて重なつてひとつの中になつた。

みていたよ みていたよ

わたしたちはお前たちをみていたよ

おもしろいね おもしろいね

うつくしい毛並みのたびねこよ

お前の心はとても強い

おしえてあげよう おしえてあげよう

ここから山二つ越えた先にある

湖のほとりに小屋があるのさ

魔女はそこに住んでいる

きをつけなさい きをつけなさい

あいつはとても悪いやつだよ

あいつは
わたしたちの若枝を平氣で折るんだ

ファイファイルは満足そうに、木々たちにお礼をいった。

「ムクリ、私は行くよ。私の帰りを、きみはここで待つていておくれ」

ムクリは頷いた。ふたりはいちど抱き合つて、そうして、ムクリはファイ

ファイルの背中がすっかり見えなくなるまで、そこでじつと見送りをした。

ファイファイルは籠を背負つてどんどん進んでいった。一つ目の山を越したとき、籠の中の木苺をひとつとつて食べた。二つ目の山を越したとき、さらに二つの木苺をとつて食べた。そうしてしばらくいくと、大きな湖が見えてきて、そのほとりに、ファイファイルは魔女の住む小屋を見つけた。

ファイファイルが小屋のドアをノックすると、いやな感じのするきんきん声が返事をして、魔女が姿を現した。背の高い、すらりとした細長い手足が、



黒いマントからはみ出ている。魔女はファイファイルの姿を目に留めると、三日月形の目をにつこり細め、ファイファイルを中へと招き入れた。

「うつくしい毛皮のねこや、どうしてあたしのところに来たんだい？」

「私の名はファイファイル。友人の代わりに、ここへやつて来た。どうか私の友人에게た呪いを解いてやつてほしい。彼は反省している。彼にはもう、呪いは必要ないのだ」

ファイファイルはそう言つて木苺の籠を魔女に差し出した。魔女はよく熟れた木苺を見るなり、籠をファイファイルからひつたくつた。魔女は実のところ、昔ムクリに呪いをかけたことなど覚えてはいなかつたし、思い出そうともしていなかつた。しかし魔女は、ファイファイルの姿を、とくにそのうつくしい毛並みをじつくりと眺めて、ねつとりとした甘つたるい声で言つた。

「いいだらう、うつくしい毛皮のねこや。けれど、木苺をもらつたくらいじや、あの呪いは解いてやれないねえ。そうだ、うつくしい毛皮のねこや。そこにある水がめの中に、あたしや大切な指輪を落としてしまつたんだ。それを取つてくれたなら、あんたの友人の呪いをすぐに解いてやろうじやないか」

魔女は部屋の隅すみにある水がめを指さした。それはファイファイルの背丈の倍以上の大さで、中には縁までたっぷり水が入つていた。

ファイファイルは言つた。

「わかつた。あの中にもぐつて、指輪を取つてくれればいいのだな。そうすれば、私の友人の呪いを解いてくれるのだな」

魔女はもろんだと請合うけあつた。ファイファイルは、魔女の三日月の目をじつと見つめた。

「しかし、私はお前を信用していない。指輪を取ることは容易たやすいが、それはお前がムクリにかけた呪いを解いたあとにしよう。私は、約束は必ずまもるねこだ」

「先に呪いを解けつていうのかい」

魔女は面倒くさそうな顔じゆもんをしたが、ふいに片手を上にあげると、ファイイルには聞き取れない言葉で呪文じゆもんを唱えた。

「さき、これでお前の友人の呪いは解けたよ」

魔女はファイファイルを無理やり水がめのほうに押しやりながらにんまりした。

「さて、証拠がほしい。ムクリの呪いは本当に解けたのか」



賢治のまちから 高校生☆童話大賞

「おやおや、うつくしい毛皮のねこや。お前はなんてわがまま我わがまま何んだろうねえ！」
それじゃ、そこの机の上の水晶玉をのぞいてごらんよ」

魔女はそう言つて古ぼけた裁縫台の上の水晶玉を指さしたが、じつはそれはのぞいた者の望みを映す水晶玉だった。

魔女はうなムクリが映つてゐる。それでファイファイルは、魔女がムクリの呪いを解いたのだと思った。

「ああ魔女よ、有難う！ それでは私も、約束をまもろう」

ファイファイルはすぐにかめによじ登り、中に飛び込んだ。

指輪をさがして目を凝らしていると、そこに魔女の腕がぬつと伸びてきて、水中でファイファイルの頭をがつちり掴んだ。ファイファイルが暴れても、魔女の細い骨ばつた指はファイファイルを水の中へどんどん沈め、とうとうファイファイルは水がめの中で溺れ死んでしまつた。

魔女は大喜びでファイファイルの死体をかめから取り出すと、その皮を剥いだ、うつくしい毛皮を壁に飾つた。

ムクリが森でぼんやりとファイファイルのことを考へてゐると、急に森の木々がざわりざわりと囁きだした。

ムクリは、木々たちが自分に話しかけているのだとわかり、あわてて耳をぴんと立てた。無数の木々の枝がきしみ、悲鳴のような音を立てる。

しんでしまつたよ しんでしまつたよ

うつくしい毛並みのたびねこが

しんでしまつた しんでしまつた

魔女の小屋で殺された

魔女はうつくしい毛皮を剥いで

汚い壁に飾つてゐるよ

しんでしまつた しんでしまつた

魔女にだまされ殺された

ムクリはそれを最後まで聞こうとしなかつた。ムクリは声を上げて耳を両手で押さえつけ、むちやくちやに走り出した。それでも、森の声はムクリを追いかけて囁きかける。



しんでしまったよ しんでしまったよ

魔女にだまされ殺された

魔女にだまされ殺された

しんでしまった しんでしまった

しんでしまった しんでしまった……

ムクリは、いつもの小高い丘の上で空を見上げていた。雲ひとつない鮮やかな青空が広がっている。ムクリは確かめるようにそつと、つぶやいた。

「ぼくは、幸せだった」

そうしてムクリはしばらくじつとしていた。ムクリは自分になんの異変もないと分かると、今度はすこし、胸をはつて言つた。

「そうだ、ぼくは幸せだったんだ。ぼくはそれだけで満足だ」

しづかに息をすいこむと、ムクリは、空を仰いで、祈るように、叫んだ。
「ファイファイルは、生きている。笑顔で、うつくしい毛並みのまで、ぼくのところに戻ってくるんだ」

ムクリは嘘をついた。

ムクリの最後の一言が空に吸い込まれたと同時に、ムクリは空を仰いだ格好のまま、物言わぬ石になつた。

気がつくと、ファイファイルは見慣れた小高い丘に立つていた。

風がゆっくりと、つややかな毛並みを撫でていく。身体は乾いてあたたかく傷ひとつない。自分の身に起こったことをひとつずつ思い出しながら、ファイファイルは辺りを見回した。

まず、目の前にムクリがたたずんでいるのに気がついた。
それから、ムクリが石になつているのに気がついた。

石像となつたムクリが、空を仰いでたたずんでいる。

ファイファイルは、なぜムクリが石になつたのかをすぐに理解し、あまりのことに体中の毛が逆立つた。

大きな両目からはどんどん涙が溢れ出したが、なぜか笑顔のかたちをやめることができない。ファイファイルは笑顔をくしゃくしゃにして、声を上げて泣いた。

たびねこファイファイルがこの森を去つたあとも、時がたち、「うそつきねこ」



の伝説だけが森に残った今も、木々はムクリの石像を風雨からそつとまもり、枝を揺らしてムクリにかかった塵をやさしく払い落としていく。

これは、語られることのない物語。

うそつきムクリが最後についた、優しいやさしい嘘の、おはなし。